

令和4年度 江戸川区立船堀小学校 学校関係者評価 最終評価用報告書

学校教育目標	よく考えずんで学ぶ子 思いやりがある心豊かな子 さいごまでやりぬく子 たくましくじょうぶな子	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	子供が学びを通し、互いにかかわり合いながら思いを伝え合う学校 子供、保護者、地域の思いに寄り添った導きのできる学校 教職員同士が互いの思いを伝え合い、新たな教育の創造ができる学校
前年度までの学校経営上の成果と課題	<p><成果> 各種学力調査において国、都の正答率を大きく上回る結果となった。また、授業改善に向けた研究授業を年間8回実施し、「主体的、対話的で深い学び」の視点による授業改善を日常的に行った。コロナ禍であっても各種専門家を招き、関心を高める授業を展開することができた。</p> <p><課題> 本を活用して探究的活動を行う「読書科」の推進については課題を残した。計画的に読書科推進を行い、問題解決力の育成を行う必要がある。体力の向上に関しては、体力テストの結果では都、国の平均を下回るものが多い。</p>		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価		来年度に向けた改善策	
					取組	成果	成果と課題	評価		コメント
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	新たな時代に求められる学力(3つの資質・能力)をバランスよく身に付け、主体的、対話的に自ら深い学びを実現していく児童の育成	①主体的、協働的に学習に取り組む態度の育成 ②放課後補習事業(週1回、2～6年)の活用 ③校内研究を年間8回実施し、「主体的な学び」をつくる授業改善に組織的に取り組む。 ④ICT機器の活用による授業改善・家庭学習の充実	①東京ベーシックドリル診断テストにおいて全学年で正答率85%以上を達成する。加えてCD層の削減を図る。 ②児童意識調査「友達の考えと自分の考えを比べて自分の考えを深めている」肯定率84.5% 「自分からずんで学習している」90%の数値向上 ③ICT機器の授業・家庭学習での活用率向上 ④全国学力・学習状況調査において正答率を国、都平均を上回ること	A	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 学力調査の結果が、国や都の平均を上回るなど良好であることが素晴らしい。日頃からの教職員の指導の成果と考える。この状態を今後も維持できるよう努力を重ねていただきたい。 ICT機器の活用については、より効果的な活用方法を見つけ、積極的に取り入れていくよう求める。 主体的に学ぶ児童の育成は、今後も課題として取り組んでほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> CD層の向上を目標に補習教室を実施したが、どの基準で入れ替えを行うか、また、どこまで達成を目標とするかが課題となっていた。補習教室の実施方法についてD層の児童を先に対象にしたり、テスト以外の要因でも必要に応じて対象にしたりするなど改善を行う。 3学期に診断テストをする等評価に間に合わないことから、児童アンケートの実施日を再検討する。 	
	体力の向上	体育の授業改善及び運動遊びの計画的な実施により、運動に親しみ子供を育てる。	①年間35回以上の中休みを活用した「運動遊びの時間」クラスマイルタイムを実施し、ずんで運動遊びに親しめる児童を育成する。加えてなわ跳び週間、持久走大会等に取り組む運動機会を確保する。 ②各種運動領域の特性に応じた「楽しい体育」の授業を行い、3つの資質・能力のバランスが取れた学力を体育科学習を通して身に付ける。	①児童意識調査「休み時間にずんで運動遊びをしている。」肯定的回答率86.1%の数値向上 ②体力テスト6月実施における体力合計点、全国平均以上を全学年で達成を目指す。	B	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童意識調査「休み時間にずんで運動遊びをしている。」肯定的回答率83.4%とわずかに低下した。特に高学年の肯定率が低い。クラスマイルタイムなどの取り組みには参加しようとしているため、運動遊びを活発にするための取り組みにより一層力を入れ、外遊びが日常化できるようにする。また、体育学習にはめあてをもって意欲的に取り組んでいる様子が見られた。運動の楽しさを感じられるよう、さらに授業改善に取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 体力の早急な向上は望みにくいが、長期的展望として目標を定め、引き続き子供たちの体力増進に努めていく必要がある。 休み時間に先生方が子供と遊ぶ姿をよく見かける。大変よいことである。今後も継続してもらいたい。 来年度は体育の研究を行うことなので、よい機会であるため、本校の体力向上に結び付けてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間や朝の時間を使って、運動遊びのより一層の充実を図り、子供が日常的に運動する習慣をつくらせていく。 「楽しい体育」の実現を目指して、学校全体で体育科の授業改善に取り組んでいく。 児童アンケートの問い掛け方や体力テストの目標値の設定など、現在の子供の実態に合わせて評価指標を見直す。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	①朝読書(15分)+1単位時間(45分)により年間35時間の授業時数を実施する。 ②読書科、図書館活用に関わる研修会、授業公開の実施により、指導法の理解を深める。 ③読書科ノートを活用した授業実践を積み重ね、学校公開時に保護者、地域に授業を公開する。(学年1回) ④学校図書館を積極的に活用する。	①児童意識調査「本を使って疑問を調べている」79.5% 「目的に応じて本を読もうとしている」80.6% 「調べたことをまとめたり、伝えようとしていたりしている」81.5% 全ての項目で数値向上を図る。	A	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童の意識調査は、3項目中2項目で3パーセント程度の数値の向上が見られた。これは、読書に親しむよう、また様々な領域の本に親しむよう。読書月間で大々的に取り組んだこと、全学年が読書科の授業を通じて調べ学習に取り組み終えていることが功を奏していると言える。 一方、数値が向上しなかった項目もある。これは、取り組み自体は実施しているものの、継続的ではないため児童の意識に残らないのではないかと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校公開で、保護者に読書科の授業公開をしたことは大変大きな意味がある。読書科を周知していくためにも、今後も継続していくとよい。 子供たちの読書科の作品に、先生方の指導の充実がうかがえる。読書科の成果がよく表れている。 公立図書館ともよく連携を取り、図書館サテライト事業を教育活動の充実に活かしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在、朝読書の時間はテーマを決めて読書をしているが、来年度は、前学年までに使用した読書科ノートの形を使って月に一問程度の簡単な調べ学習を定期的に行っていく。 自由読書と調べ学習との2本立てで朝読書の時間を通年で過ごすことにより、調べるツールとしての読書を活用する方法が、より定着するのではないかと考える。
特別支援教育の推進	共生社会の実現に向けた教育の推進	・多様な価値観や立場を尊重し、理解し合える子供の育成を図る。	①個に応じた指導の充実を図るため、各学年、特別支援教育コーディネーター、専門員、SC等が連携した特別支援委員会を定期開催する。 ②エンカレッジルームを適切に運用する。 ③ユニバーサルデザインの授業実践を推進する。 ④学年、教科の実態に応じ積極的に交流学習を推進する。 ⑤なかよし班活動を充実させ多様な関わり合いを大切にした教育活動を行う。	①児童意識調査「友達と仲良くかわらわろうとしている」肯定的回答95.1%の向上 ②巡回指導学級児童の満足度調査90%以上 ③定期的な特別支援委員会の開催と情報共有を行う。	B	B	A	<ul style="list-style-type: none"> HyperQUテストを行い、結果を分析した。児童の学校生活に対する考えや友人関係などを把握することができ、指導に活かすことができた。この結果を個人面談で保護者に保護者に伝えることができた。 エンカレッジルームを活用しづらい状況にある。担任から直接担当に伝えられるように、全体で情報共有する。 コーディネーターだけの発行など、実践していることを伝達することができた。 特別支援教育研修会で、支援方法や障害への理解を深めることができ情報共有ができた。 児童意識調査では肯定的回答率95.3%で0.2ポイント向上した。 昨年度は感染対策で実施できなかったなかよし班遊びも、今年度は計画通りに実施することができた。また、2学年で遠足も実施したり、なかよし班フェスタの運営や遊びを全学年で行えたことで、異学年交流の活動をとても充実したものにする事ができた。 来年度はこれまで感染対策として制限していた活動を行っていき、さらなる活動の充実を目指していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童がお互いをよく理解し合い、共に学校生活を送っていくことは、児童の健全育成上とても重要である。 船堀小学校の子供たちは、とても落ち着いて生活している。「友達と仲良くかわらわろうとしている」という項目が、今後も現実に行動に移されていくことを願っている。 不登校対策としてのエンカレッジルームの効果的な活用について、検討してほしい。 コーディネーターだけの発行やホームページでの周知など、実践していることを保護者等に伝達していく。 特別支援教育研修会で、支援方法や障害への理解を深める。 	
	子どもたちの健全育成	・児童理解の充実を図り、誰もが安心して過ごせる学校づくりを行う。 ・不登校への対応を的確に行い状況の改善に取り組む。	①hyperQ-Uテストを実施し、各学級の児童の意識を明確に把握し、児童理解に結び付ける。中でも要支援群に位置する児童への個別の対応を充実させる。 ②ふれあい月間における児童アンケートの実施と活用 ③いじめの状態に応じたいじめ校内委員会の開催	①いじめ問題の早期発見を行い、解決率を100%とする。 ②不登校状況の具体的な改善(登校日数の増加、面談機会の増加、放課後登校の増加等)	B	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 毎月、不登校対策委員会を行い情報共有を行うことができた。不登校児童に対する担任の意識も高く、電話や家庭訪問、SSWの活用など状況に合った支援を行うことができた。 いじめアンケートの聞き取りや学年間での情報共有など行うことでいじめを未然に防ぐよう努められた。アンケートを行わない時も、継続して児童の様子を共有していくことが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校対策に力を入れて取り組んでいるとうかがっている。全国的に不登校は増加傾向にあるため、今後も兄相やSSWなどの関係機関との連携を強化し、不登校対策をさらに充実していただきたい。 全ての生徒たちに居場所や立場、役割があるように、家庭や保護者とも連携をとっていただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校状況をさらに改善できるよう、組織体制の改善を行うとともに、個々の児童や家庭に寄り添った相談体制を整えていく。 学校だけではなく、スクールソーシャルワーカー(SSW)、スクールカウンセラー(SC)、教育研究所などの関係機関と連携を密にとり、具体的解決策を継続していく。 指導の記録をデジタル化して可視化するとともに、情報を共有し、組織として課題に立ち向かう。
特色ある教育の展開	「学校における働き方改革プラン」	「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	①SSS及び学年アシスタントの導入と効果的な活用 ②一斉定時退勤日(年間12回)の実施 ③ペーパーレス化の推進	①月あたりの時間外勤務45時間以内の全員達成 ②ストレスチェック結果におけるストレス状態の減少(前年度比)	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 月45時間以上の時間外勤務状態は散見されるが、前年度と比較するとかなりの時間削減につながっている。 学校からの配布物を電子化したことで、印刷業務の削減や、児童の指導に充てる時間が確保された。 ストレスチェックの結果が大幅に改善した。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務は減少傾向にあるとうかがっているが、依然として月45時間以上の教員もいる状況であるため、働き方改革をより一層進め、子供たちの指導に先生方が向き合える時間をしっかりと確保していただきたい。 人的措置についての運営努力がよく感じられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 定時退勤日のさらなる徹底と定着を図る。 個々の勤務時間の使い方についてさらに工夫をし、より効率的な時間の使い方を進めていく。 学年アシスタントやSSSのさらなる有効活用を図り、業務の適正化、平均化を図り、個々の業務量の差を減少させる。
	清掃活動の実施	自ら美しい環境を作ろうとする意識を育てるため校内清掃活動を復活させる。	①学校全員で取り組む清掃活動の導入	①週2回の清掃活動を実施する。	A	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 2学期から、火曜日・金曜日(週2回)の清掃が定着し、子供たちも自発的に行動する姿勢が身に付いた。コロナ禍ではあるが、清掃の意義を理解させ、今後も習慣として継続していくことが必要であると感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍にあって控えていたことを、どのようなタイミングで再開するかを今後も検討していただきたい。 教育的価値のあるものは、順次再開する方向でいってはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 清掃活動の教育的価値を児童の成長につなげ、よりよい校風の醸成に役立てる。 清掃活動以外にも教育的価値のあるものの優先順位を定めながら、全体計画を立てる。